学生にとっての「個人」

文・秋江眞人（文学部三年）
写真・滝本勇紀（経済学部三年）

附属幼稚園

子どもたちの「個人」観

先日幸運にも、小学校五年生の道徳の授業に参加する機会をいただいた。授業に参加するといっても、保護者参観のように、教室の後ろの方に立って授業の様子を見るというだけのものだが、子どもたちの言葉の一つ一つを注意深く聞いてみると、あまりにも身勝手な解釈の「個人」という言葉が使われていたような気がする。

例えば先生が、「五の（レベルの）声を出してみて」と言うと、児童たちは声を張り上げてワイワイと騒ぐ。先生は「今度は一の声を出してみて」と言うと、大抵の子はボソボソと小さな声で喋るが、なかに一人、二人はやっぱり大きな声を出す子がいる。「なぜ、そんなに大きな声をあげるの」と聞くと、「声の大きさなんて個人によって違うじゃないか」と返す。

しかし、違う場面では、「個人」の尺度を肯定する彼らは、「個人」の尺度で動く「個人」を攻撃する。公園で掃除をしているボランティアのおじいさんの写真を見せると、「そんな人はいるはずがない」と言うのだ。

「個人」の肯定と「他人」の否定

「個人」という言葉を手元の辞書でひいてみる。「一人一人。私人。社会の中の一人一人の人間」とある。「個人主義」を引いてみる。「個人の意義と価値、権利と自由を主張し、尊重する主義」とある。反対語は「全体主義」だった。ちょっと意地を張った子どものよくやることと言われればそれまでであるが、そこで終わるものでもないと思う。

「個人」を肯定しながら、結局は自分の思うように動かない他人は否定されることになるし、それが数の論理に流されれば、すぐに村八分である。これが、全体の否定される理由の一つであろうが…。

ここで自分が聞きたいのは、我々が本当に個人を経験したことがあるか、ということである。「個人を尊重する」という考え自体に文句を言っているわけではない。しかし我々は、個人の枠を超えることをあまりにも恐れていないだろうか。私は、「個人」という過剰な防衛線を自ら張り巡らし、他人の「個人」という過剰な防衛線を乗り越えられないでいることを感じる。

学生生活の匿名性

学生の生活の一つの特徴に、匿名性というものが挙げられる。「隣の人は何をしている人なのか顔も見たこともない」というものだ。自分も隣の人の顔はさっぱりわからない。友人に聞いても、同じような答をよく聞く。「もし、隣人がうるさくて夜眠れなければどうするか」と聞くと、「うるさい方の壁を叩いて、隣人に気づかせる」という。女性では「我慢する」というのもあった。なぜそうするのか、気持ちはよくわかる。波風を立てるのが面倒くさいのだ。ギスギスした関係、間の悪い関係が大嫌いなのである。もっとも、女性の場合はそれだけではないのかもしれないが…。

「みんなにいい奴と思われたい。少なくとも嫌な奴とは思われたくない」そんな意識が根深いものとしてあり、隣人に自分の不満気な顔を見せ、相手の怒り、不安を呼び起こすことにためらいを持たせる。または文句を言ったにしても、「自分だっていつもうるさいじゃないか」と切り返され、傷つくことを恐れている。個人と個人の、否定的な感情での対峙に脅えているのである。学生街の一部屋一部屋には、こんな人間模様がある。

「個」と「他」の関係

人間一人ひとりに尺度はあるだろう。ある尺度をすばらしいと感じる人もいるだろうが、気に障る人もいるだろう。その尺度を絶対的に否定することは、その人自身の個人意識と矛盾することであるし、気に障る尺度を押しつけられるのなら、自分の尺度を明示するしか方法はないのである。「個人」というものが一人歩きして、「自分」というものにすりかわっていないだろうか。「他人」は「自分」と「他」を含めた意義を持っていなければならないと思う。

「他」を「社会」と置きかえてもいい。

自分の中に、肯定的な立場にある「自分」と「他」との関係のみを内に取りこみ、否定的な、例えば怒り、不安な関係にあるものには、「自分」との間に棲み分けの感を与えるのでは、「個人の尊重」という部分の欠けるものでしかない。「社会」という部分が、我々の意識の中であまりにも欠如しているのではないだろうか。

「個人」の中に隠れる「他」というキーワードを見つけなければ、結局は、自己意識の中にしか自分の「個人」は存在できず、「自分」というベクトルは「他」と平行線しか描けず、これから出てゆく社会の中では、「存在の許される場」でしか「存在」できなくなってしまうことになるだろう。「それでいい」という人もいるだろう。しかしそれは、私の尺度から言えば、あまりにも哀しい。

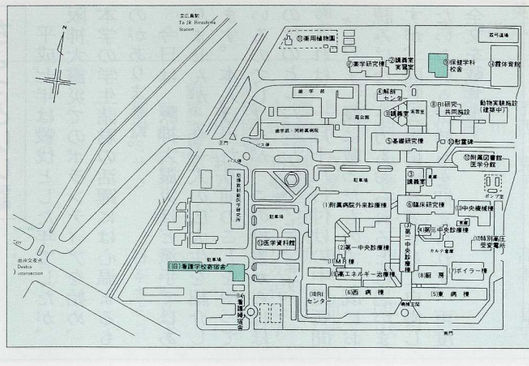
社会における大学生の役割、大学という環境にとどまらず、今この大学に、学生としている自分を見つめ直して欲しい。

プロフィール

（あきえ・まさと）
◇倫理学専攻
◇趣味はツーリング
◇サークルは少林寺拳法部に所属

お知らせ

医学部保健学科、霞キャンパスに新築移転

平成四年四月に設置された医学部保健学科は、東千田キャンパス内の旧総合科学部の校舎を仮校舎として講義および研究を行ってきたが、霞キャンパス内に建設中の校舎の第一期工事の終了により二月一日から移転が行われ、二月七日に竣工式が行われた。

これに伴い、教官研究室は霞キャンパス内の旧看護学校宿舎の建物に移転した。引き続き第二期工事が行われ、教官研究室が新築される予定。